

「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第18巻 日本語と文明

著者	庄司 博史
ページ	139-139
発行年	2011-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10502/4881



梅棹は、一九八〇年代後半、それまでの日本語に関して書きためた論考を三つのテーマに分けて刊行した。本書は、それら『明日の日本語のために』、『日本語と日本文明』および『日本語と事務革命』（すべて、くもん出版）をそのまま収録したものである。

ここには、「国文学者でも国語学者でもない」といいながら梅棹が日本語に関してくりかえしてきた大胆な発言の多くがおさめられている。それらは大きく梅棹独自の日本語表記論、標準語論、国際語論という三本柱にまとめることができる。いずれも梅棹の合理主義と文明史観にねざした一貫性のある主張で、何よりも梅棹自身の実践に裏打ちされているところに特徴がある。

それらのいわば中心に位置するのが日本語表記論である。梅棹は、日本語には近代語の条件たる確固とした標準語も表記法も存在しないと批判していたが、特に、定まった送りがない、読み方の存在しない複雑な漢字かなまじり表記は、学習に多大な時間と労力を必要とするだけでなく、やがて文書の電子化の時代が訪れた際、文字入力や検索でローマ字を用いる他の言語に取り残されることを危惧していた。梅棹の主張した訓読み廃止、ローマ字やカナ志向は重要な選択肢であった。

一九七〇年代末、日本語ワープロの出現により、漢字変換の問題が一挙に解決されたかに見えたが、梅棹は日本語表記の問題はなにも解決されていないと断言している。漢字使用はみだれ、古臭い漢字が復活するといった梅棹の予言はまさに的中し、書けもしない漢字があふれるようになった。

とはいえ、PCワープロの普及により、ほとんどの人がローマ字で日本語入力をしている現実がある。今日ほど日本人の指がローマ字にしたしんだことはない。日本語のローマ字化にあれこれ理由をつけ反対する人も実はローマ字を用いているのだ。ひよっとすると梅棹の待望した、日本語のローマ字化まではあと一歩かもしれない。（庄司博史）